

テイキング・ライブス(TAKING LIVES)

2004(平成16)年9月19日鑑賞〈道頓堀東映パラス〉

★★★★



監督=D.J. カルソー／出演=アンジェリーナ・ジョリー／イーサン・ホーク／キーファー・サザーランド／ジーナ・ローランズ／オリビエ・マルティネス／チェッキー・ケイリオ／ジャン＝ユグ・アングラード(ワーナー・ブラザーズ映画配給／2004年アメリカ映画／103分)

……^{プロファイラー}猟奇殺人犯と心理分析官との「闘い」を描いて、一躍有名となった『羊たちの沈黙』(91年)や、『ボーン・コレクター』(99年)等と並ぶ「プロファイリング映画」の最新傑作。知性と強さのみならず、女の弱点をさらけ出した中で、FBI 特別捜査官を演ずるアンジェリーナ・ジョリーの熱演は、『羊たちの沈黙』におけるジョディ・フォスターと肩を並べるほどステキ！ 予想もつかないストーリー展開にも大感激で、私の超おススメ作！

第5章

映画のよしあしは俳優で決まる！

これは必見と直感！

この映画は、公開前から新聞紙上でも結構前宣伝されており、「アンジェリーナ・ジョリー主演最新作」がうたい文句。そして、「冷酷な素顔を隠しているのは、誰だ。」「キミノカワリニイキテアゲル」というキャッチコピーがあるものの、それだけではどんなテーマの映画なのか、サッパリわからなかった。

しかし、アンジェリーナ・ジョリーがFBI 捜査官に扮するサイコ・サスペンスと知った途端、これは是非観なければ、と直感。あのジョディ・フォスターを一躍有名にした傑作『羊たちの沈黙』(91年)の系譜を受け継いだ映画であれば、何としても観なければと思ったもの……。その結果は、直感ピタリで大満足……。

プロファイリング映画とは？

プロファイリングとは心理分析、プロファイラーとは心理分析官のこと。そしてプロファイリング映画とは、心理分析官を主人公として登場させた映画。

その最高傑作は、ジョディ・フォスターがFBI捜査官となり、アンソニー・ホプキンスがレクター博士となった『羊たちの沈黙』(91年)だが、その下敷きとなったのは、トマス・ハリスの小説『レッド・ドラゴン』。この小説『レッド・ドラゴン』における捜査官ウィル・グレームこそが、最初に世に登場した「プロファイリング」の天才であり、その脇役として登場していたのがハンニバル・レクター博士だった。晩年(?)のアンソニー・ホプキンスの「代表作」となったハンニバル・レクター3部作と言われている、『羊たちの沈黙』(91年)、『ハンニバル』(01年)、『レッド・ドラゴン』(02年)は、いずれも必見のプロファイリング映画。

最初の惨劇はレンタカーで

1983年、舞台はカナダのモントリオール。旅の途中、偶然知り合ったA君とB君の2人の青年は、乗り合わせたバスが故障。仕方なく、レンタカーを借りて移動していると、そのレンタカーもタイヤが外れてしまうというひどい故障。こりゃどうなっているんだと思いつつ、A君がタイヤの入れかえ作業をしていると、B君は突然A君を、通りがかった車の前へ蹴り飛ばしたからたまらない。通りがかった車はA君をはね飛ばしたうえ、ひっくり返って炎上。当然A君は、虫の息状態。するとB君は、そんなA君の頭をそばにあった大きな石でガツン……。死亡したA君の名は、マーティン・アッシャー。マーティンの死亡は、彼の母親の元へ知らされた……。

第2の惨劇は工事現場から

その数年後、モントリオールのある工事現場。ショベルカーにひっかかって現れたのは、1つの白骨死体。その死体は絞殺されたうえ、両手を切断されていた。この殺人事件の捜査を担当するのはモントリオール警察だが、捜査本部長のレクレア(チェッキー・ケイリオ)は、アメリカのFBIに応援を要請した。

「広域猟奇殺人」のにおいをかぎとったレクレアは、FBI行動科学課に籍を置くプロファイラーのイリアナ(アンジェリーナ・ジョリー)の応援が不可欠と判断したためだ。レクレアの部下のデュバル刑事(ジャン＝ユグ・アングラ

ド)はこれに異議を唱えないものの、「なぜ FBI なんかに応援を頼むのか」と大いに不満なのは、FBI に対する対抗心丸出しのパークット刑事（オリビエ・マルティネス）。モンリオールにあるこの捜査本部の3人はみんなフランス系で、しゃべっているのはフランス語。だから、イリアナへの「悪口」はフランス語でやっていたが、実は……。

イリアナの登場

イリアナとレクレアは年齢は違うものの、FBI で同時期にともに学んだ仲。イリアナのプロファイラーとしての能力は、レクレアの折り紙つきだ。映画では、プロファイラーとしてのイリアナの最初の登場場面が面白い。捜査本部に本人が着任して挨拶を交わした後、事情説明を受けるというのが普通のパターンだが、この3人の捜査員とイリアナとのご対面は、何と、白骨死体が発見された穴の中。つまりイリアナは、1人でこの穴の中に寝そべって横たわり、犯人の思考の中に入り込むことによって、犯人の心理を分析し、犯人像に迫っていたというわけだ。その分析結果を次々と説明するイリアナは自信満々で、「これぞ優秀な FBI 女性捜査官！」というイメージにピッタリのもの。

そんなイリアナを苦々しそうに見つめ、対抗心をむき出しにするパークット刑事だが、イリアナの指摘は、すべてなるほどごもつともなもの。その結果、捜査は少しずつ進展するかのように見えたが……。

第3の事件は目撃者あり！

そんな中で起こったのが第3の殺人事件。ここでも、被害者の身体はボロボロに損傷されていたが、今回は目撃者がいた。目撃者の名は、コスタ（イーサン・ホーク）。画商をやっており、捜査にも協力的だが、何か曰く因縁ありげ……？ このコスタは、本当に目撃者にすぎないのか？ 彼は、本当は有力な容疑者ではないのか？

コスタを尋問したイリアナは、わざと（？）犯人が使った凶器を床に落としてコスタに見せると、コスタは明らかに動揺したが……。しかし、被害者が手にしていた毛髪は、DNA 鑑定の結果、コスタのものではないと出た……。

他方、「死んだはずの息子を目撃した」と警察に届け出た老婦人は、マーティンの母親であるアッシャー夫人（ジーナ・ローランズ）。アッシャー夫人は目を合わせたのが一瞬であっても、自分の息子の目をまちがえるはずがないと断言し、さらに、「あの子はとても危険な人物です！」と警察に異例の警告を……。

このアッシャー夫人から事情を聞くため、その自宅を訪れたイリアナは、アッシャー夫人から、「マーティンは双子の兄弟だったが、可愛がられていた1人は小さいときに死亡し、残ったマーティンは親の愛を知らないまま育った」と聞かされた。そして、敏感なイリアナは、なぜかアッシャー夫人の自宅に「隠れ部屋」があることを感じとっていた。さて、これは……？

テイキング・ライブスとは？

この映画の日本語タイトルの『テイキング・ライブス』とは、原題の『TAKING LIVES』をそのままカタカナ表記したもので、これはいわば「人生を乗っ取る」というような意味。

1983年のマーティンの死亡以降、20年間にわたって広域的に発生していた猟奇殺人事件には、いくつかの共通点があった。イリアナがこれらを詳細に検討、分析した結果達した結論は、マーティン・アッシャーは生きており、彼が「TAKING LIVES」しているということだった。

つまりマーティンは、自分の死を仮装するため、最初の被害者に成りすまし、以降20年間にわたって、次々と被害者を変えてはその人物に成りすまし、その人物の人生を乗っ取っていたということだ。だから、この犯人による被害者の死体は、全てボロボロに損傷されて、身元がわからなくされていたわけだ。

女性捜査官の心の揺れは……？

ここまで見事な推理を働かせたイリアナだったが、そうすると犯人が狙う次の犠牲者は……？ それは誰が考えても、犯人を目撃したコスタだった。コスタには厳重な警備がつけられたが、これは同時にコスタを狙ってくる犯人を逮捕する絶好のチャンスでもあった。そんな危険な役割をコスタが了解したのは、単なる捜査への協力ではなく、美しく聡明な FBI 捜査官イリアナに対する個人的好意か

らだった……？

そんなことを感じて動揺したのは、誰よりもイリアナ本人。なぜなら、イリアナは生まれてはじめて、プロファイラーとしての殺人事件の捜査中、重要な事件関係者であるコスタに対して、女性としての個人的な好意をもっていることに気づいたからだ。個人的感情をもったことを自覚したイリアナは、本部長レクレアに対して、捜査陣から自分をはずしてくれるよう依頼したが、レクレアはこれを却下。やむなくイリアナは、今までどおり懸命に職務に邁進したが……。果たして、コトはすんなりと進むのだろうか……？

殺人犯を無事逮捕？

コスタを狙って画廊に現れたのは、謎の男のハート（キーファー・サザーランド）。しかし、警備の捜査員らに気づいたハートは、人込みの中へ逃走してしまった。いよいよ身の危険の切迫を感じたコスタは、捜査陣の指示に従って部屋をひき払い、一時身を隠すことに。

しかし、そこで大きな事件が待っていた。厳重な警備のスキをついて、コスタの前に登場したハートは、まんまとコスタを殺害しようと……。そこに駆けつけたデュバル刑事は、ハートの反撃にあって、あえなく殉職死。そして、コスタを乗せたハートの車を追跡するイリアナ。2つの車の壮絶なカーチェイスの挙げ句、転覆したハートの車の中からコスタが生き残り、爆発した車の中で殺人犯のハートは死亡。これで一件落着となったはず、だったが……。

この映画はここからが面白い！

以上でストーリーの紹介はおしまい。なぜなら、これ以上書いてしまつては、この映画の面白さが台無しになってしまうから。後は、映画を観てのお楽しみだが、その面白さは、私が保証しておきたい！

2004(平成16)年9月21日記